

DATA

データで見る 産婦人科医の実態

産婦人科専攻医登録者を対象に行ったリクルートアンケート結果 (2023年)

【背景】

産婦人科専攻医数は近年横ばいであり、2024年に医師の働き方改革が開始されたことを考えると更なる人員確保が必要である。一方で、医学生や臨床研修医が勤務地や専攻する診療科に求める要素は年々変化しており、産婦人科専攻に影響する因子の探索は重要である。

【目的】

産婦人科へのリクルート繋がるように、産婦人科専攻の決定に寄与した因子を明らかにすることを目的とした。

【調査期間】

2023年4月1日～2024年3月31日

【対象者】

2023年度産婦人科専攻医登録者

【方法】

専門管理研修システム用いたオンライン形式
回収率上昇のための方策として、アンケート期間の延長、対象者へのリマインドメール、リクルートイベントのチャーターを経由したアンケート回答依頼を行った。

【回収率】

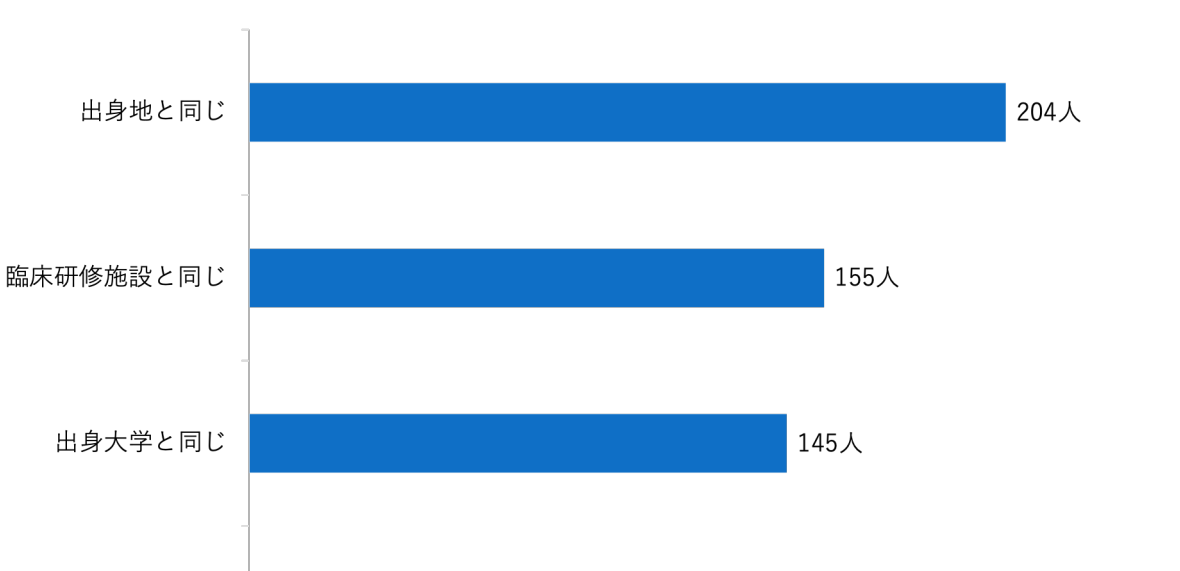
87.3% (413人/473人)

A 背景

項目名	人数 (%)	
性別	男性	142 (34.4%)
	女性	265 (64.2%)
	無回答	6 (1.4%)
結婚の有無	既婚	128 (30.1%)
	未婚	274 (66.3%)
	無回答	11 (2.6%)
子の有無 (複数回答)	あり	31
	なし	363
	妊娠中	11
	無回答	11
家族・親戚中 の産婦人科 (複数回答)	両親	53
	祖父母	19
	兄弟姉妹	11
	その他	10
	いない	341

男性142人(34.4%)、女性265人(64.2%)であり、比率が昨年と同様であった。

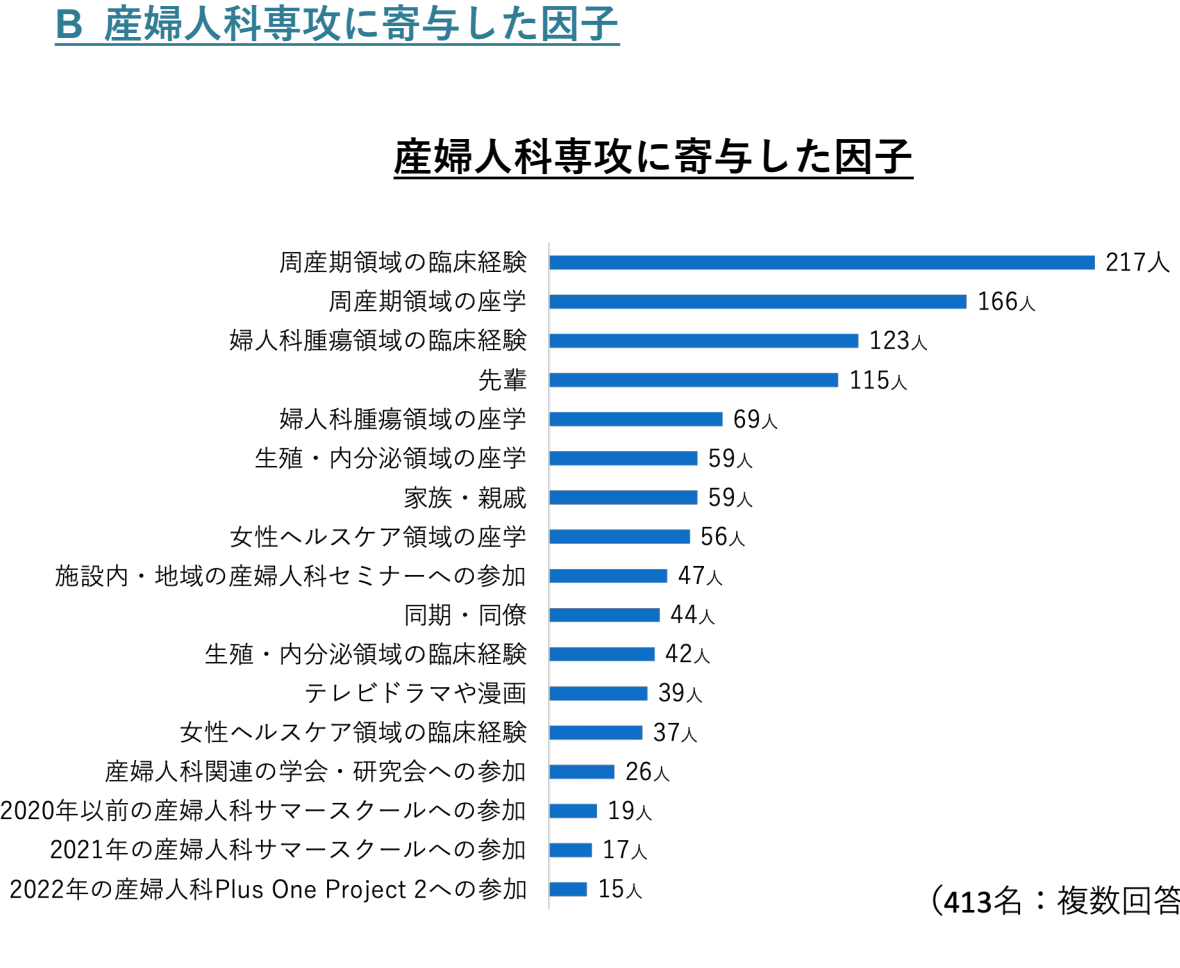
研修施設の地域



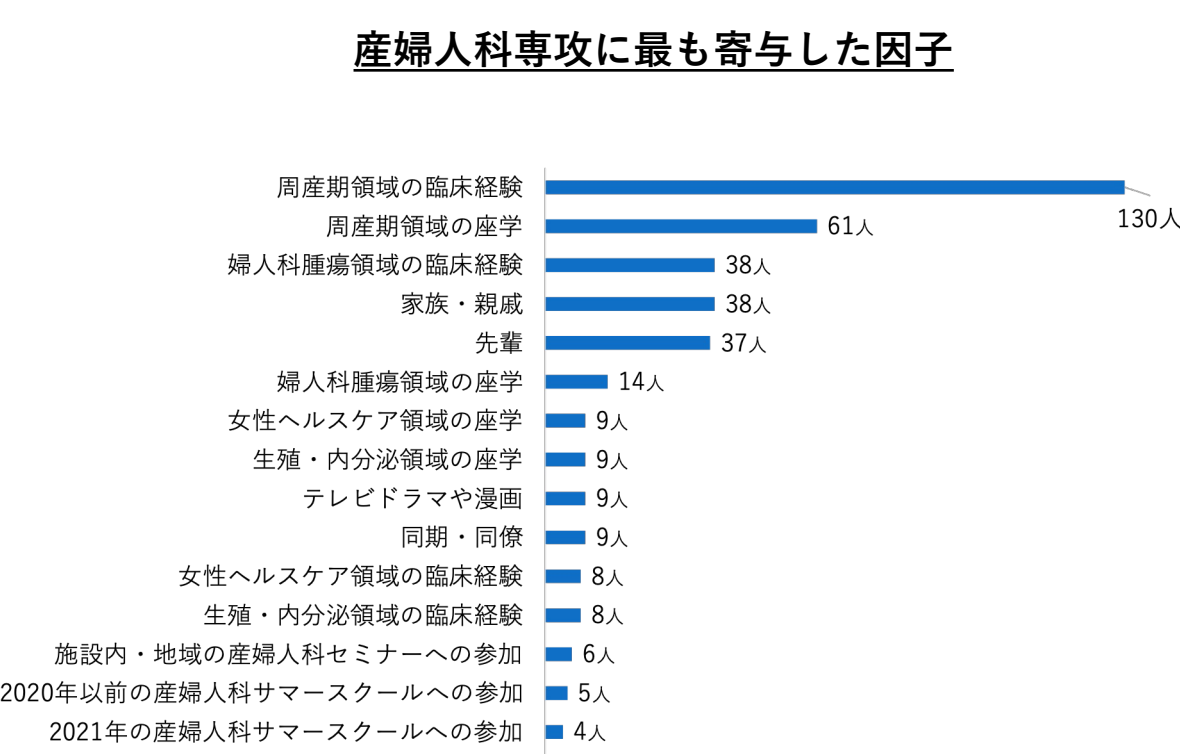
研修施設は、昨年と同様に出身地と同じ地域の施設での産婦人科研修が多かった。

B 産婦人科専攻に寄与した因子

産婦人科専攻に寄与した因子



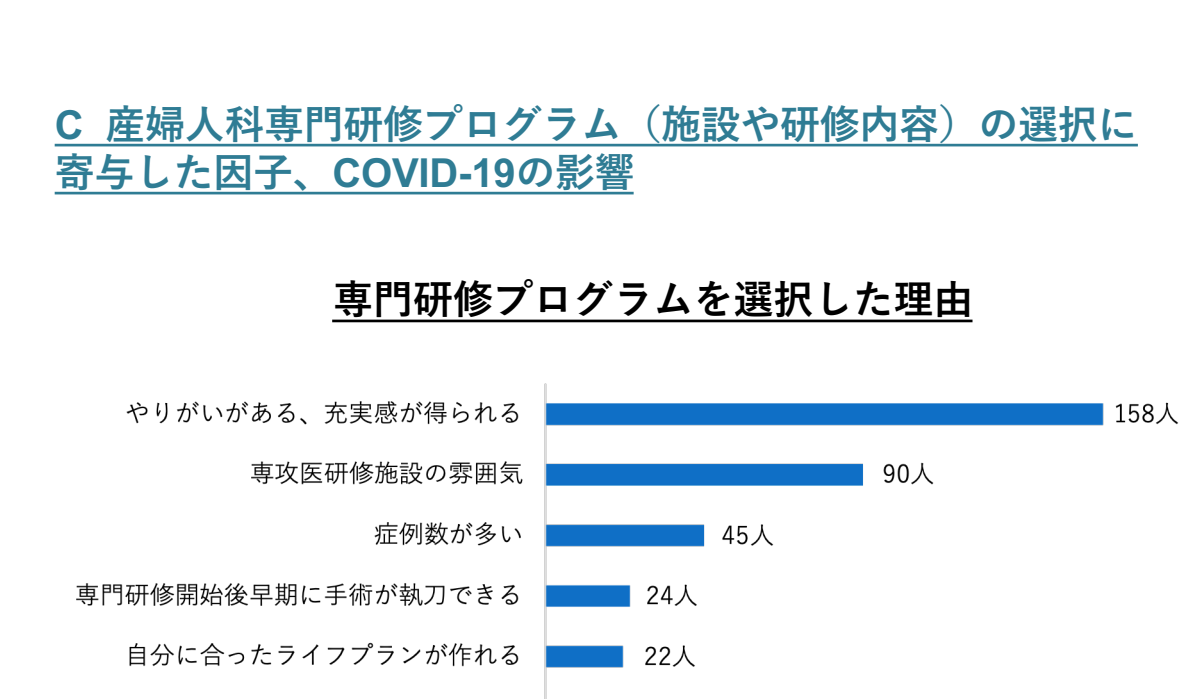
産婦人科専攻に最も寄与した因子



産婦人科専攻の決定に寄与した因子は、例年同様に周産期の臨床経験・座学、婦人科腫瘍領域が上位を占めた。昨年と比較し、テレビドラマや漫画の影響が少なかった。最も寄与した因子については、昨年と同様に周産期の臨床経験が最多であった。

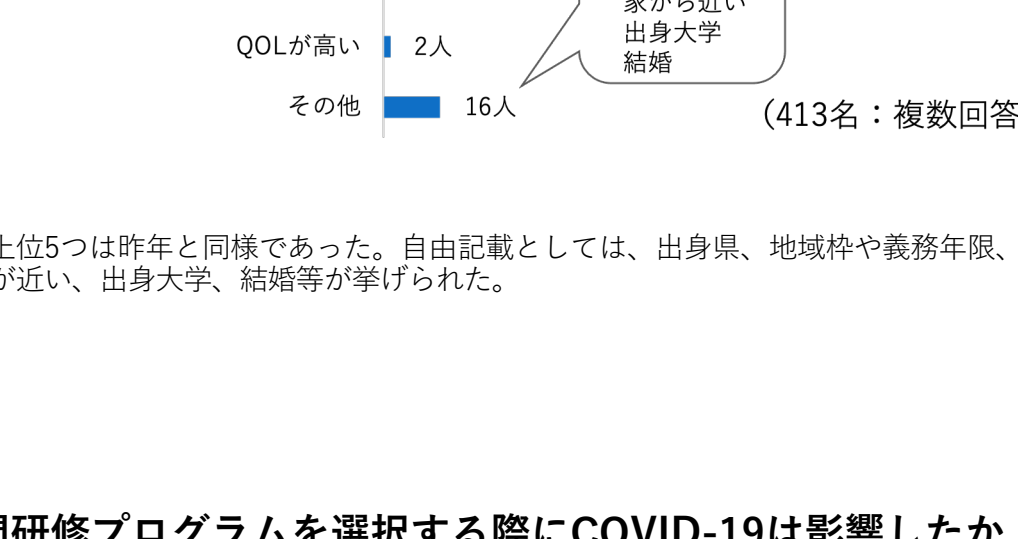
C 産婦人科専門研修プログラム（施設や研修内容）の選択に寄与した因子、COVID-19の影響

専門研修プログラムを選択した理由



上位5つは昨年と同様であった。自由記載としては、出身県、地域枠や義務年限、家から近い、出身大学、結婚等が挙げられた。

専門研修プログラムを選択する際にCOVID-19は影響したか



産婦人科専門研修プログラムにおけるCOVID-19の影響は、昨年と比較し上昇していた。「影響があった」と回答した理由の多くは施設見学の制限であった。

D 考察-産婦人科を志す臨床研修医・医学生へ-

2023年度の産婦人科専攻医登録者を対象としたアンケート結果から、産婦人科専攻の決定に寄与する因子や専門研修プログラムの選択理由について検討しました。本考察では、これから産婦人科専攻を考える臨床研修医や医学生の皆さんに向けて、アンケート結果をもとにした提言をお伝えします。

まず、2023年度の専攻医登録者の男女比は、男性が34.4%、女性が64.2%と、昨年とほぼ同様の割合でした。近年、産婦人科専攻医の女性割合が6割を超える傾向が続いており、女性医師にとって働きやすい環境づくりがますます重要になっています。また、既婚者の割合は31.0%、子供がいる方の割合は7.5%でした。子どもがいる環境から産婦人科専門研修を始める先輩医師もおり、ライフイベントと両立しながらキャリアを積んでいくことは十分に可能です。皆さんも、自身のライフプランに合わせて産婦人科専門医を目指すことができますと考えてください。さらに、家族や親族に産婦人科医がいる方の割合は17.4%であり、身近なロールモデルの存在が産婦人科専攻に影響を与えていることが伺えます。

次に、産婦人科専門研修施設を選択において、出身地と同じ地域が49.3%、出身大学が35.1%、臨床研修施設が37.5%と関連性が高いことがわかりました。昨年度の結果（出身地：51.2%、出身大学：22.8%、臨床研修施設：19.1%）と比較すると、出身地と同じ地域の割合がほぼ同じである一方、出身大学と臨床研修施設の割合が増加しています。このことから、地元志向は依然として強いものの、大学や臨床研修施設とのつながりを重視する傾向が強まっていると推察されます。皆さんも、自身の生活基盤やこれまでの研修環境を踏まえつつ、ライフイベントとの両立も考慮して専門研修施設を選択することをご検討ください。

産婦人科専攻の決定に寄与した因子として、周産期の臨床経験（52.5%）、周産期座学（40.2%）、婦人科腫瘍の臨床経験（29.8%）、先輩医師の影響（27.8%）が上位に挙げられました。昨年と比較すると、周産期領域の臨床経験や座学がやや減少し、先輩医師の影響が増加しています。これは、COVID-19の影響で臨床経験の機会が減少し、身近なロールモデルとの交流がより重要になったことを示唆しているのかもしれませんが。

一方、産婦人科専攻の決定に最も寄与した因子として、周産期の臨床経験（31.5%）が最も高い割合を示しました。次いで、周産期領域の座学（14.8%）、婦人科腫瘍の臨床経験（9.2%）、家族・親戚の影響（9.2%）、先輩医師の影響（9.0%）と続いています。昨年度と同様の傾向であり、医学生・臨床研修医の皆さんには、周産期領域をはじめ、腫瘍・生殖内分泌・女性医学とあらゆる領域の研修に積極的に参加し、その魅力を肌で感じてもらいたいと思います。また、先輩医師や家族・親戚からのアドバイスも参考にしながら、自身の適性や興味に合った専攻科選択を行ってください。

専門研修プログラムの選択理由では、やりがいや充実感（38.3%）、施設の雰囲気（21.8%）、症例数の多さ（10.9%）、手術の執刀機会（5.8%）が挙げられました。昨年と比較すると、やりがいや充実感、施設の雰囲気の割合が同様に上位を占めており、専攻医が研修内容や環境を重視していることがわかります。皆さんには、自身の目標に合った研修内容や環境を提供できるプログラムを選ぶことをお勧めします。病院見学や説明会などを通じて、各プログラムの特色を確認し、自身に合ったプログラムを見つけてください。

産婦人科専攻を考える皆さんには、本アンケート結果を参考に、自身のキャリアプランに合った選択をしていただければと思います。日本産科婦人科学会では、皆さんの産婦人科専攻を全力で支援してまいります。ぜひ、産婦人科の未来を担う一員として、私たちと一緒に歩んでいきましょう。

以上

2024年 9月（令和6年度）

日本産科婦人科学会産婦人科未来委員会内若手委員会
リクルートアンケートワーキンググループ

未来委員会
林 昌子、末光徳匡

若手委員会
上條恭佑、福井大和、秋田啓介、小川紋奈、山下 優、
吉田智昭、飯田祐基、今井啓太、加嶋洋子、向井勇貴